

過疎地域の祭祀現状

——単一産業型集落栃木県旧足尾町の事例——

冬 月 律

過疎問題は、近代以降の我が国の高度経済成長がもたらした社会問題の一つとして国政上にも難しい問題と認識されてきた。過疎は現在も新たな社会問題である限界集落、少子高齢化問題とともに着実に進行中であり、いつ止まるのかさえも予測できない。

神社界においても、住民が急激に増加した地域の神社と、それとは逆に住民が急激に減少している地域の神社では如何なる対策を採るべきかが重要な課題になっている。伝統文化や民間信仰などの場合は、地域社会（共同体 community）と密接な関わりをもっていることが多く、地域住民とのつながりが大事とされる傾向にある。中でも我が国特有の存在である神社は、かつては共同体を構成する人々の社会生活の中心となっていた。近年、そのような地域社会が、過密・過疎によって崩壊（共同体機能不全）しつつあることは周知のことであろう。

他方、我が国にはかつておびただしい数の鉱山が存在し、鉱山を中心として町ができ、鉱石運搬のための道・鉄道・港などが発達した。そして、鉱山から得られた資源は日本の近代化の原動力にもなっていた。しかし、戦後、貿易の自由化、海外の安価な鉱石の流入などのいわゆる社会構造の変動によって国内の鉱山は次々と閉山に追い込まれた。多くの鉱山は閉山とともに

に、人々は離散し、宗教施設や町は破壊・放棄され、鉄道も廃止、道は草に埋もれ、わずか数年で無人の荒野となってしまったところも多い。

本報告は、足尾銅山の歴史とともに隆盛から衰退への道をたどった旧足尾町、とりわけ本山地域を対象に、地域内の集団信仰の対象であった神社と、それをとりまく地域との間にどのような変化が生じているかについて分析することを目的としている。

一方、本報告の調査対象地域である旧足尾町の本山地域は、「伝統的かつ閉鎖型コミュニティ」でもなければ「農村型コミュニティ」（広井良典、二〇一〇）でもない。つまり、家族や村落など、血縁や地縁に基づいて自然的に発生した閉鎖的な社会関係をもつ社会集団ではなく、「銅山」という単一産業構造による利害関係に基づいて人為的に作られた社会、銅山活動とともに各地から人々が集まって形成された集落、いわば疑似的（人為的 artificial）共同体として位置付けることができる。換言すれば、近代化・少子高齢化・都市化にともなう共同体の衰退とはその性格が異なることを意味する。旧足尾町本山地域は、伝統社会をもっており、その伝統社会が過疎という社会変動によって衰退あるいは崩壊しつつあるといった典型的な過疎地域とはいえない。しかし、銅山開発によって人為的に形成された共同体とその地域に建立された神社の関係は銅山歴史とともに変化していった。本報告は、ある時期の出来事を中心に置き、疑似的共同体と神社の関係を探る、いわば特殊事例である。

なお、調査地の選定については、本山銅山との関連性が高

く、今回の研究に最も適している地域であると考えられる本山地域を対象としている。

本報告の小結としては、本山地域の町は、銅山閉山によって衰退したが、神社活動については、現状維持が困難で、町復興の可能性も低いと思われる中でも神社への地域住民の関心が高く、毎年の例祭もきちんとされていることが調査によって明らかになった。

今後の課題としては、本報告のために行った追加調査で現存する五つの集落は他所の地区の祭りとは一切関わりを持っていないことが判明した。また、地区は大きく分けて坑夫こうふと町部ちやうぶに分類することができ、神社に対する関心についても異なる性格を持つていることが明らかになった。それは一体どのようなことなのか、また、それには単一産業集落の持つ性格と何らかの関係があるのかについて次回の調査で明らかにしたい。

洪水と稲作儀礼

——大垣市十六町の粥占いを中心に——

下 本 英 津 子

粥占いは、日本列島に広く分布する儀礼だが、占いという性質のためか実態は不明な点が多い。井之口は、「超人間的な力の存在を信じ、それに対処する知識や技術」である俗信の一つとして、粥占いを位置づけた(井之口章次『日本の俗信』弘文堂、一九七五)。また谷口は、粥占いの特徴として、実際の生

産活動を規定する側面を持つことを示唆している(谷口貢「年占の形態と宗教構造」『宗教学論集十号』駒沢大学宗教学研究會、一九八〇)。

本発表では、こうした先行研究を踏まえて、大垣市十六町で行われる粥占いを取り上げる。十六町における自然環境や稲作農耕から、粥占いという儀礼を分析したい。

大垣市十六町は、濃尾平野北西部の氾濫原に位置している。地下水や河川など、水が豊富であり、かつては自然に水が湧く自噴井が多くあった。夏期は特に地下水位が高まり、耕地にしばしば水がにじみ出る。そのため水田稲作には向くが畑作には向かず、畑は耕地全体の二割の微高地に限られる。また時に水は氾濫を起こすため、十六町には、集落と耕地の一部を囲う輪中堤防が作られている。水の統御は輪中全体で行われる。十六町の耕地は、堤防内と堤防外にそれぞれ分散して所有されている。このように、十六町は水の恵みを受ける水田地帯であり、同時に水の規定を強く受ける地域である。

粥占いは、正月一五日に近い日曜日に行われる。粥占いを行う場所は八幡神社である。八幡神社は、十六町の最北西部に位置している。町内で最も標高が高く、水につきにくい。近世の絵図によると、ここは隣村からの取水口であり、またかつては境内に自噴井があった。この意味で八幡社は重要な取水口の一つである。このように八幡社は、水利用と水防を象徴する神社である。

十六町の粥占いは、麻縄で縛った女竹二〇本を使用する。竹筒を小豆粥の釜に入れ、粥が煮たったら取り出し、竹筒の中に